

平成26年度 森林内の放射性物質の分布状況調査結果について

農林水産省は、東京電力福島第一原子力発電所の事故を受け、平成 23 年度から福島県内の森林において土壌や落葉層、樹木の葉や幹などの放射性セシウム濃度とその蓄積量の調査を実施しており、この度、平成 26 年度の調査結果を取りまとめました。

1. 調査の概要

東京電力福島第一原子力発電所の事故により、森林地域に放射性物質が降下しました。農林水産省は、森林内の放射性物質の分布状況等を的確に把握した上で、森林の取扱い等の対策を検討するため、平成 23 年度から、独立行政法人森林総合研究所（以下「森林総研」という。）と連携し、発電所からの距離が異なる福島県内の 3 町村（川内村、大玉村、只見町）において、森林内の土壌や落葉層、樹木の葉や幹などの部位別の放射性セシウム濃度と森林全体の放射性セシウムの蓄積量を調査しています（森林内における放射性物質実態把握調査事業）。

2. 調査内容

(1)調査箇所

福島県川内村（スギ）、大玉村（スギ、アカマツ、コナラ）、只見町（スギ）の国有林、川内村上川内（スギ）の村有林

(2)調査方法

各調査地において、空間線量率を測定したほか、落葉層の試料と、深さ別の 4 層の土壌（0～5、5～10、10～15、15～20cm）の試料を採取しました。

調査地周辺で対象樹種を各 3 本選び、伐採して、葉、枝、幹に分け、幹については樹皮、材に分けました。

部位別の試料は乾燥・粉碎した後、ゲルマニウム半導体検出器によるガンマ線スペクトロメトリ法で放射性セシウム 134 及び放射性セシウム 137 の濃度を測定しました。

3. 調査結果及び考察

(1)部位別の放射性セシウム濃度の変化について

葉や枝、樹皮など樹木の部位別の放射性セシウム濃度は、2011 年の調査開始以来、引き続き低下傾向にありました。葉の濃度は 2013 年に比べ、スギは 27～41%に、アカマツは 35%に、コナラは 63%に低下しました。枝の濃度は 28～60%に、樹皮の濃度は 36～87%に

低下しました。また、木材内部の心材と辺材の放射性セシウム濃度は全般に低く、2013年と比べて大きな変化は認められませんでした。

落葉層の濃度は、2013年に比べ51～83%に低下しましたが、葉や枝など他の部位より高い濃度となっています。土壌の濃度は、これまでと同様、表層土壌0～5cmの層が最も高く、5cmより深い層はその10分の1以下で、下層にいくほど低下する傾向を示しました。

(2)森林全体の放射性セシウム蓄積量と分布の変化について

森林全体の放射性セシウム蓄積量は、初期沈着量の最も多かった川内スギ林では次第に減少する傾向を示し、これ以外の調査地では、蓄積量の変化の明瞭な傾向は認められませんでした。いずれの調査地も、森林の地上部の樹木に蓄積する割合が減少し、落葉層や土壌に蓄積する割合が増加しました。

部位別の放射性セシウムの蓄積量の割合については、2011年から2012年にかけて土壌の割合が大幅に増加するなどの変化がありましたが、2012年から2014年にかけての変化は小さなものでした。上川内スギ林を除き、土壌に分布する放射性セシウムの割合が年々増加し、2014年は全体の77～86%となりました。上川内スギ林は、2013年から2014年にかけて枝や葉の割合が減少して土壌の割合が大幅に増加する一方で、落葉層にこれまでと同様、約半数が分布していました。

(3)森林全体の放射性セシウムの蓄積量の変化は小さく土壌表層付近に留まっていることや、渓流水中の放射性セシウム濃度の調査結果等から、放射性セシウムは森林内に留まり、森林外への流出量は少ないと考えられます。

4. 今後の予定

農林水産省では、引き続き、森林総研や地元自治体等と連携しながら、森林内の放射性物質の分布状況等について継続的に調査を進めていくとともに、今回の結果を踏まえた、より効果的な除染技術の開発・実証など森林の除染や森林からの放射性物質の拡散防止に向けた取組を進めてまいります。

5. 参考

平成23年12月27日付けプレスリリース「森林内における放射性物質の分布状況調査結果について（第二報）」

http://www.rinya.maff.go.jp/j/press/hozen/111227_2.html

平成25年3月29日付けプレスリリース「森林内の放射性物質の分布状況調査結果について」

<http://www.rinya.maff.go.jp/j/press/kenho/130329.html>

平成26年4月1日付けプレスリリース「森林内の放射性物質の分布状況調査結果について」

http://www.rinya.maff.go.jp/j/press/ken_sidou/140401.html

<添付資料>

- ・（別添）平成26年度森林内の放射性物質の分布状況調査結果について

お問い合わせ先

林野庁森林整備部研究指導課

担当者：上野、吉松、中村

代表：03-3502-8111（内線 6224）

ダイヤルイン：03-6744-9530

FAX：03-3502-2104

当資料のホームページ掲載 URL

<http://www.maff.go.jp/j/press/>

(別添)

平成 26 年度森林内の放射性物質の分布状況調査結果について

1. 背景と目的

東京電力福島第一原子力発電所の事故により、森林地域にも放射性物質が降下しました。独立行政法人森林総合研究所は、農林水産省と連携し、福島県における森林内部の放射性物質の分布状況を明らかにするため、平成 23 年（2011 年）度から福島県の 3 町村（川内村、大玉村、只見町）に調査地を設け（図 1）、土壌や落葉、樹木の葉や幹などの部位別に放射性セシウム濃度とその蓄積量を調査し、公表してきたところです（平成 23 年 12 月 27 日付け、平成 25 年 3 月 29 日付け及び平成 26 年 4 月 1 日付け農林水産省プレスリリース）。

事故から 3 年半が経過した平成 26（2014）年 8 月～9 月に、前年に引き続き 3 町村 6 林分の調査地で、継続して部位別の放射性セシウム濃度とその蓄積量を調査したので、結果を報告します。

2. 調査地

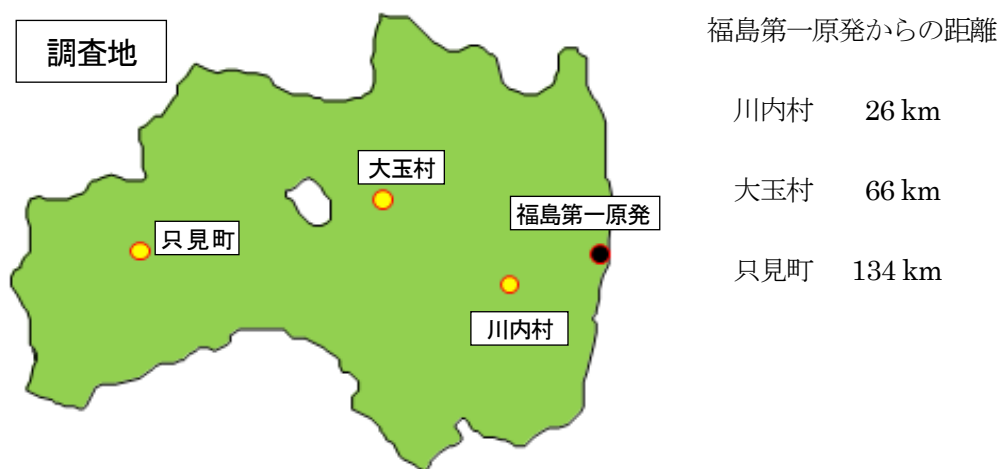


図 1 調査地と福島第一原子力発電所からの距離

調査地は、事故のあった福島第一原子力発電所から直線距離で 26 km～134 km に設けました。3 町村に共通の樹種として、福島県で最も広く植栽されているスギを選びました（表 1）。大玉村では、樹種による違いを比較するため、アカマツと落葉広葉樹の混交林でも調査しました。なお、アカマツが比較的多い場所に設置した調査林分を「アカマツ林」、コナラ等の落葉広葉樹が比較的多い場所に設置した調査林分を「コナラ林」と、ここでは呼ぶこととします。

また、川内村の上川内に平成 24 年（2012 年）度から追加で設けたスギ林の調査地も継続して調査しました。

表 1 調査地の所在地と調査期間

調査地	所在地（国有林名）	調査期間
川内	福島県双葉郡川内村（磐城森林管理署管内国有林）	平成 26 年 8 月 25 日～26 日
上川内	福島県双葉郡川内村上川内（村有林）	平成 26 年 8 月 27 日
大玉	福島県安達郡大玉村（福島森林管理署管内国有林）	平成 26 年 7 月 29 日～31 日 同 26 年 8 月 1 日
只見	福島県南会津郡只見町（会津森林管理署南会津支署管内国有林）	平成 26 年 9 月 1 日～2 日

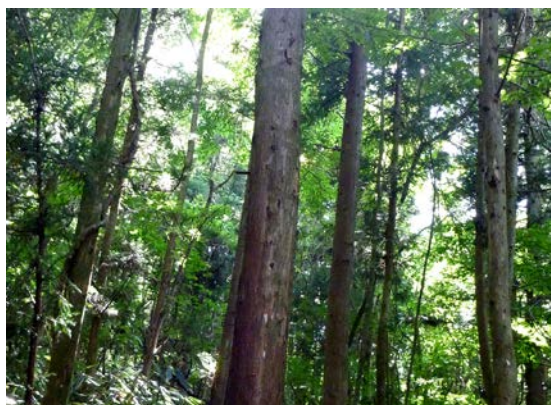


写真 1 川内調査地のスギ林



写真 2 上川内調査地のスギ林

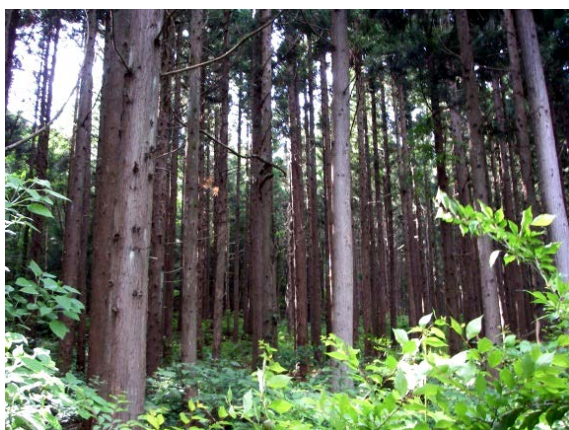


写真 3 大玉調査地のスギ林



写真 4 大玉調査地のアカマツ林



写真 5 大玉調査地のコナラ林



写真 6 只見調査地のスギ林

表2 調査地の樹種、林齢、森林管理状況及び空間線量率

調査地名	調査地の主要樹種	林齢(年)	森林管理	空間線量率(μ Sv/h) *
川内	スギ	45	育成林	1.79
上川内	スギ	58	育成林	0.80
大玉	アカマツ	45	育成林	0.20
大玉	コナラ	45	天然生林	0.20
大玉	スギ	44	育成林	0.20
只見	スギ	43	育成林	0.08

*2014年の調査期間における地上1mで測定した平均値

3. 方法

調査地の樹種、林齢等は表2のとおりです。調査・分析は以下のようにこれまでと同様の方法で実施しました。空間線量率は、調査地内を10m間隔で測定しました。調査地の森林の成長量などの基礎的な調査を行い、幹の直径と樹高から幹材積や葉、枝の重量を推定しました。

分析用の試料は、はじめに落葉層（土壌の上にある落葉や落枝とそれらの腐朽した腐植からなる堆積有機物層）を採取し、その後、土壌を土壌採取用円筒（高さ5cm、内径11cm）を用いて4層（0～5、5～10、10～15、15～20cm）で深さ別に採取しました。樹木については、調査地周辺で対象樹種を3本選び、伐採して、現地で葉、枝、幹の部位に分け、幹部分は樹皮、材に分けて採取しました。材は実験室で心材と辺材に分けました。

樹木の部位別の試料、落葉層、土壌は乾燥・粉砕した後に、ゲルマニウム半導体検出器によるガンマ線スペクトロメトリ法で乾燥重量当たりの放射性セシウム（Cs-134、Cs-137）濃度を測定しました。単位面積当たりの放射性セシウム蓄積量は、面積当たりの落葉層、土壌、樹木の各部位の重量に、それぞれの放射性セシウム濃度を乗じて求めました。放射性セシウム濃度が検出限界以下の試料については検出限界値を仮置きした上で、すべての試料の平均値と標準偏差を求めました。以下、放射性セシウム濃度はCs-134とCs-137の合計とします。

4. 結果

(1) 空間線量率

2014 年における高さ 1m の空間線量率は、川内が $1.79 \mu\text{Sv/h}$ 、上川内は $0.80 \mu\text{Sv/h}$ 、大玉は $0.20 \mu\text{Sv/h}$ 、只見は $0.08 \mu\text{Sv/h}$ で原子力発電所から遠いほど低い値でした（図 2）。2011 年の空間線量率に比べ 58～73%に低下しました。

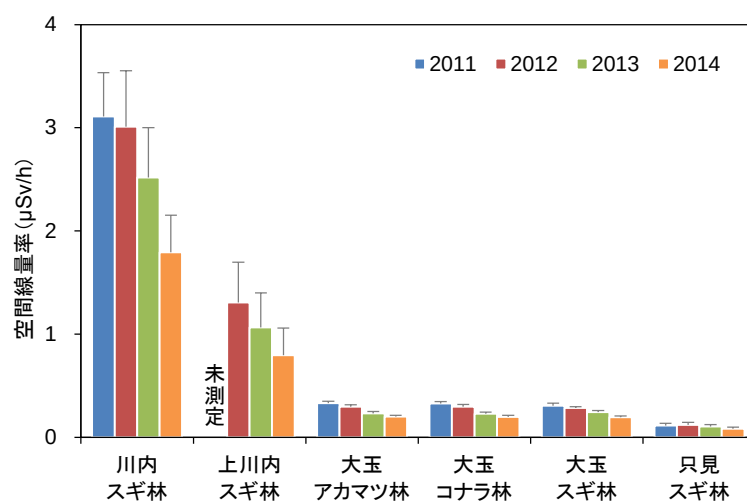


図2 2011 年-2014 年の調査地における空間線量率(平均値)の変化
(縦棒は標準偏差。2011 年の上川内は未測定)

(2) 部位別の放射性セシウム濃度の変化

葉や枝、樹皮など樹木の部位別の放射性セシウム濃度は、2011 年の調査開始以来、引き続き低下傾向にありました（図 3）。葉の濃度はスギ林が 2013 年の 27～41% に、アカマツ林は 2013 年の 35% に低下しました。コナラの葉の濃度も低下傾向にありました。また、枝の濃度は 2013 年の 28～60% に低下し、樹皮の濃度は 2013 年の 36～87% の濃度でした。また、木材内部の心材と辺材の濃度は 3～255 Bq/kg と全般に低く、2013 年と比べ大きな変化は認められませんでした。

落葉層の濃度は 2560～94200 Bq/kg の範囲にあり、各調査地とも部位別では最高濃度ですが、すべての調査地で 2013 年より低下し、2013 年の 51～83% になりました。

土壌は、2012 年までと同様、表層土壌 0～5cm の濃度が最も高く、1120～36200 Bq/kg であり、5cm より深い層は最大でもその 1/10 以下の濃度で、下層にいくほど低下する傾向を示しました。0～5cm の濃度は 2011 年から 2012 年にかけて大幅に上昇しましたが、2014 年の濃度の変化は上昇と低下が混在し、明瞭な傾向はみられませんでした。5cm より深い層の濃度変化も 2013 年と比べ明瞭な傾向は認められませんでした。

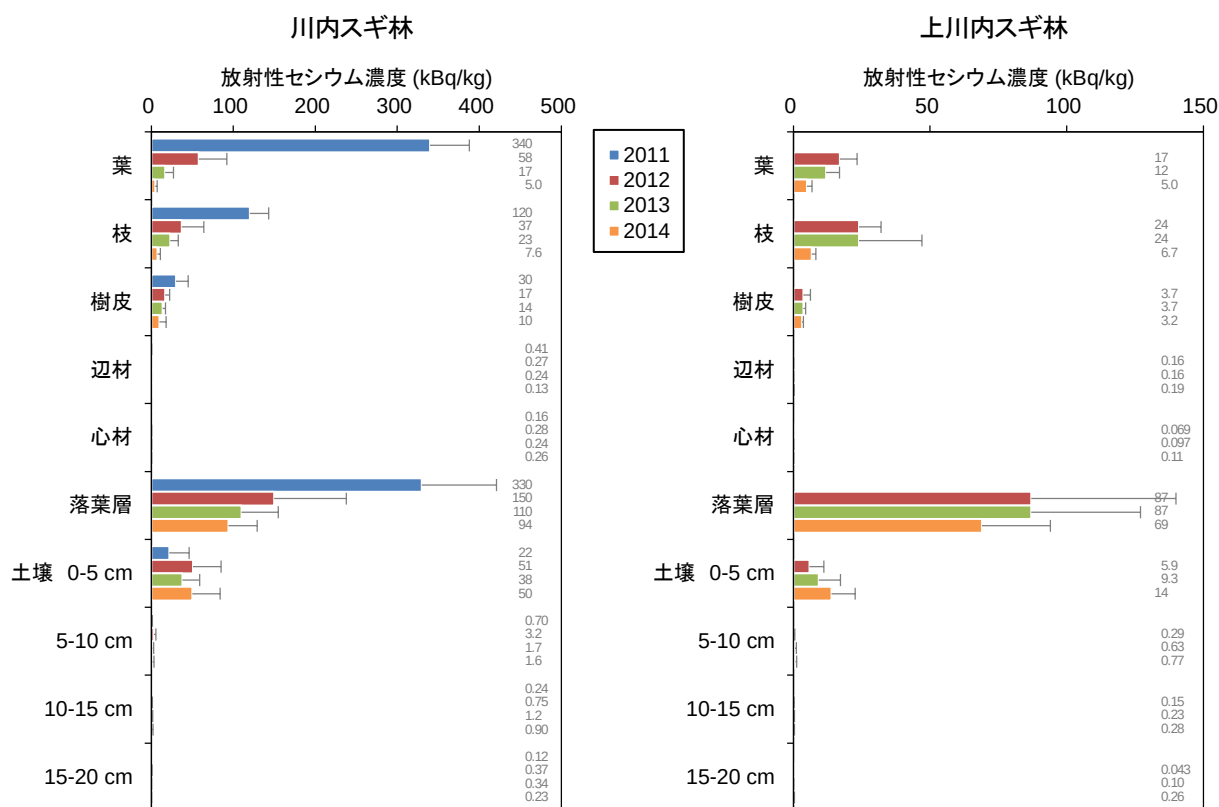


図3 各調査地における部位別放射性セシウム濃度(kBq/kg、平均値)の変化
(横棒は標準偏差。2011 年の上川内は未測定。)

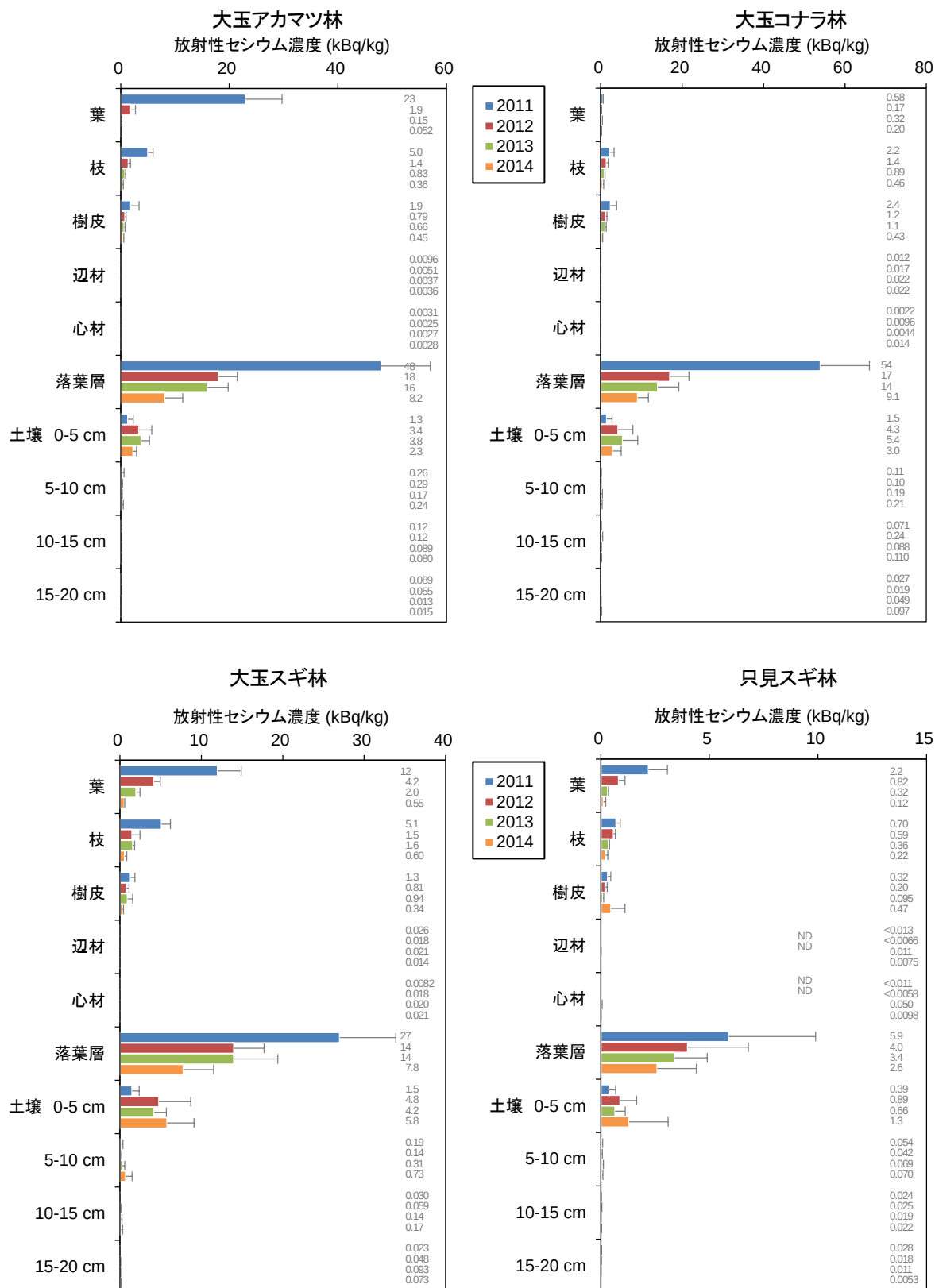


図3 各調査地における部位別放射性セシウム濃度(kBq/kg、平均値)の変化(続き)
(横棒は標準偏差。樹木部位別濃度は優占種のもの。)

(3) 汚染度の異なるスギ林4調査地における部位別放射性セシウム濃度

汚染度が異なるスギ林の4調査地において、部位別の放射性セシウム濃度を比較すると、これまでと同様、各濃度は空間線量率とおおむね比例していました（図4）。ただし、その比例関係は毎年少しずつ変化しており、特に葉や土壌では空間線量率を利用した濃度推定には留意が必要です。

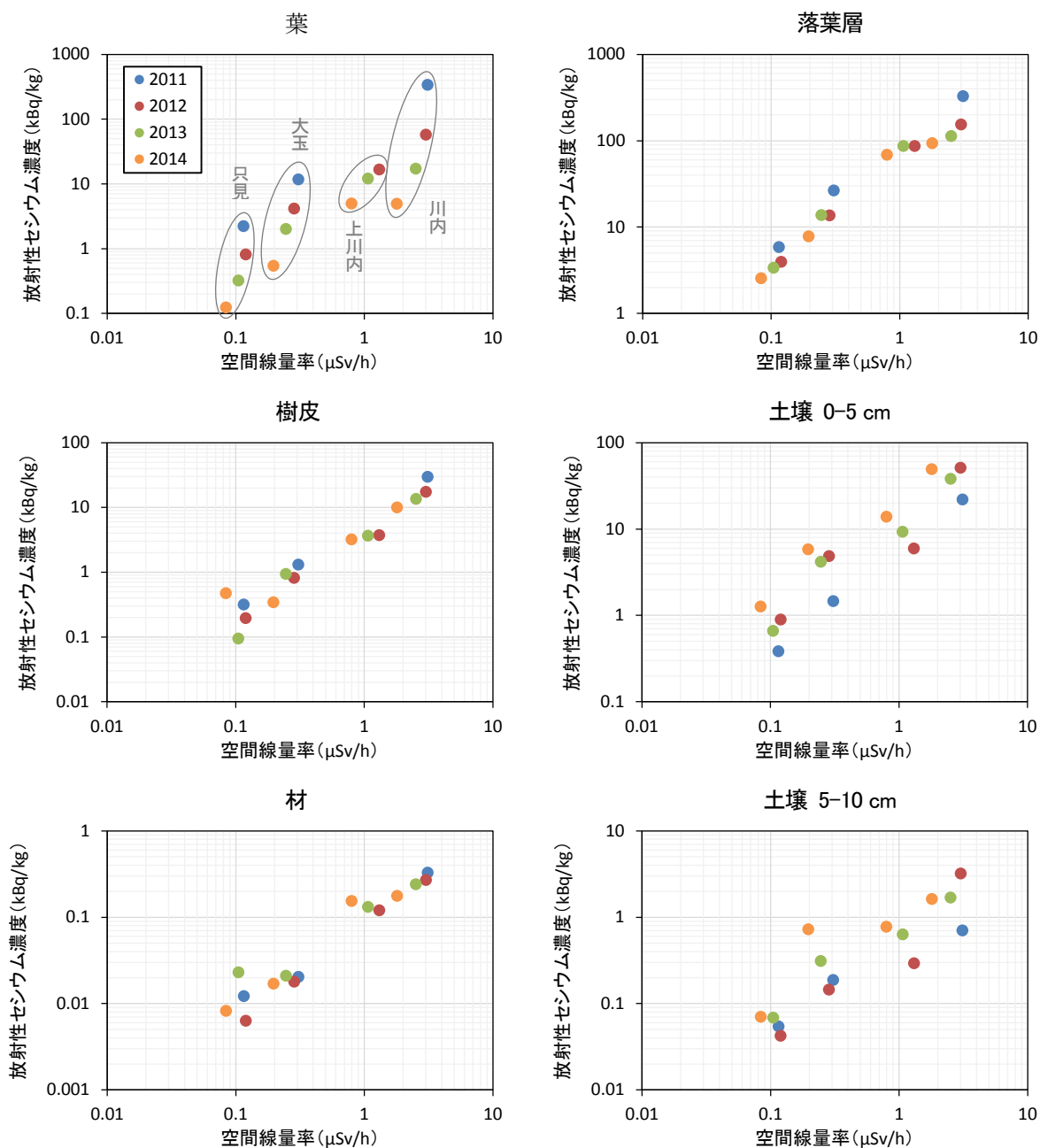


図4 スギ林4調査地における空間線量率(横軸)と部位別放射性セシウム濃度(縦軸)の関係の変化(材は心材と辺材の平均濃度。2011年の上川内は未測定。)

(4) 森林全体の放射性セシウム蓄積量と分布の変化

森林全体の放射性セシウム蓄積量は、初期沈着量の最も多かった川内スギ林では次第に減少する傾向を示しました（図5）。それ以外の調査地では、蓄積量の明瞭な変化傾向はみられませんでした。いずれの調査地も、森林の地上部の樹木に蓄積する割合が減少し、落葉層や土壤に蓄積する割合が増加しました。

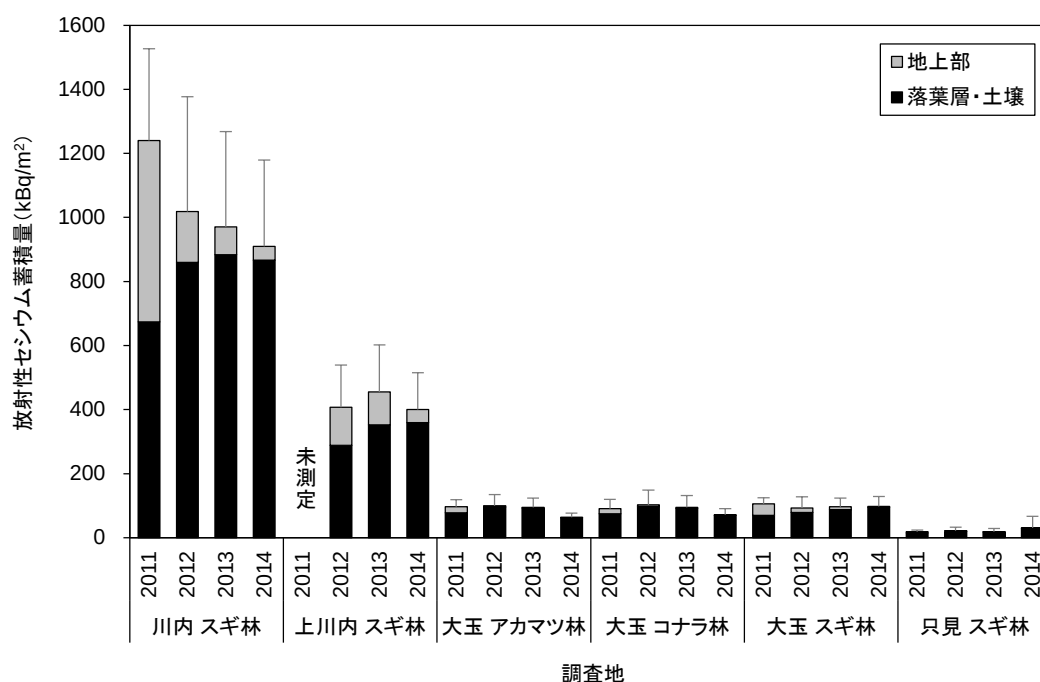


図5 2011年～2014年の森林全体の放射性セシウム蓄積量の変化
(縦棒は標準偏差。2011年の上川内は未測定。)

部位別の放射性セシウム蓄積量の割合をみると、2011年から2012年にかけては土壌の割合が大幅に増え、その他の部位の割合が低下するなど大きな変化を示しましたが、2012年以降、2014年までの変化は小さなものでした（図6）。上川内スギ林を除き、土壌に分布する放射性セシウムの割合が年々増加し、2014年には全体の77～86%に達しました。落葉層の分布割合は11～22%で2012年以降大きな変化はみられませんでした。樹木では葉や枝など各部位は減少傾向が続き、2014年はおおむね1～2%の分布となっていました。一方、他の調査地と傾向が異なっている上川内スギ林は、2014年に枝や葉の割合が減少し、土壌の割合が大幅に増加しました。落葉層にはこれまでと同様、約半数が分布していました。

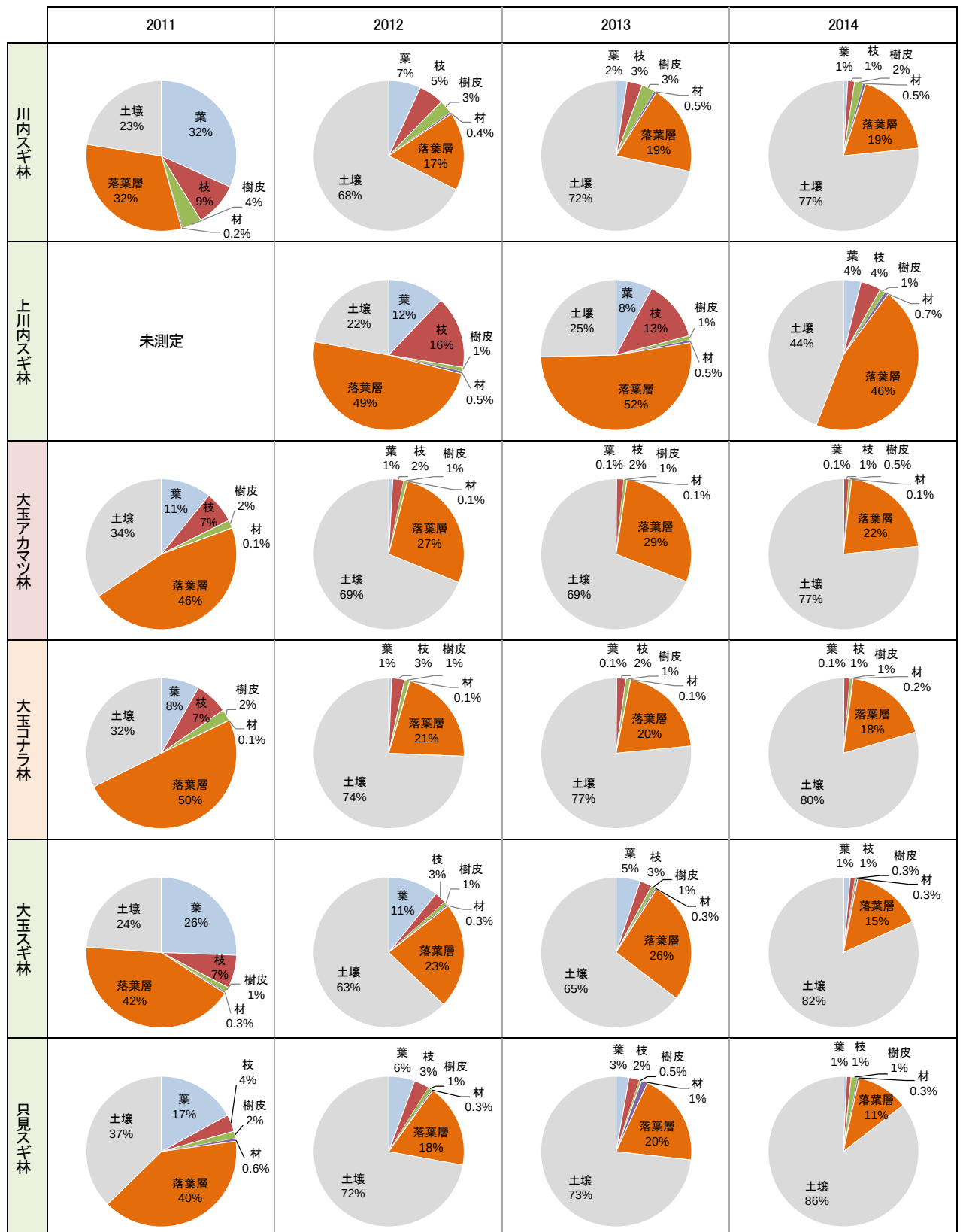


図6 2011-2014 年における各調査地の放射性セシウムの部位別分布割合

5. 考察

(1) 空間線量率の変化

2011 年から 2012 年にかけての空間線量率の低下は放射性セシウムの物理学的減衰よりも小さく、これは森林内の放射性セシウムの分布が樹木の樹冠から林床の落葉層や土壌表層に移行したことが一因と推測しました。その後空間線量率は、毎年、物理学的減衰を反映するように低下しています。

(2) 部位別濃度と分布の変化

葉や枝、樹皮など樹木の部位別の放射性セシウム濃度は、2011 年から 2012 年にかけて大幅に低下しましたが、2012 年の濃度低下は、放射性セシウムの物理学的減衰とともに、雨などにより放射性セシウムが洗い流された（溶脱）ためと考えられました。このような移動しやすい放射性セシウムの動きが収まったため、2012 年以降の濃度の変化は比較的小さかったと考えられます。

スギやアカマツなど常緑樹の葉の濃度低下は、雨による溶脱のほか、旧葉の落葉と新しい葉の伸張による置き換わりが続いた影響と考えられます。一方、毎年開葉と落葉を繰り返すコナラの葉の濃度は、4 年間では 171～584 Bq/kg の範囲での変動となり、明瞭な変化傾向はみられませんでした。

木材中の放射性セシウム濃度は、ほぼ 2011 年の濃度で推移しています。2011 年に検出された放射性セシウムは、事故直後に取り込まれたと推察されます。その後に樹木が放射性セシウムを吸収すると、木材内部の濃度は上昇すると考えられますが、これまでの調査では木材内部の濃度は依然として全般に低く、樹木が放射性セシウムを積極的に吸収していることは確認できませんでした。ただし、毎年開葉するコナラの葉に放射性セシウムが含まれることや、川内や大玉のスギ林や大玉のコナラ林の辺材や心材で濃度変化がみられることなどから、樹木に取り込まれた放射性セシウムが樹体内を移動している可能性が示唆されます。今後も調査を継続し、樹木への吸収や樹体内分布の変化を注視していく必要があります。

落葉層の放射性セシウム濃度は、2011 年の半分以下に低下したものの、依然として相対的には他の部位より高い濃度となっています。表層土壌（0～5cm）の放射性セシウム濃度は地上部や落葉層から溶脱した分が土壌の表層で保持され、2012 年に増加しましたが、2013 年、2014 年の濃度変化には一定の傾向は確認できませんでした。5cm より深い層の土壌の放射性セシウム濃度は表層より大幅に低い状態が続いています。以上より、放射性セシウムは土壌表層付近に留まり、地下への浸透はあまり進んでいないと考えられます。

(3) 放射性セシウム分布割合と森林全体の蓄積量の評価

森林内に蓄積した放射性セシウムの部位別の分布割合は、放射性セシウムの濃度変化を反映し、2011 年から 2012 年にかけては大きく変化しましたが、2012 年から 2014 年にかけての変化はわずかでした。2014 年には土壌への蓄積割合がさらに増加し、樹体へ

の蓄積割合は低下しました。上川内のスギ林は、昨年までは放射性セシウムの分布割合が他とは異なり、葉や枝、落葉層への蓄積割合が多い状態でしたが、2014 年は土壌の割合が大きく増加しました。今後は、次第に他の調査地と同じような分布になると考えられます。

森林全体の放射性セシウム蓄積量は、川内スギ林がほぼ物理学的減衰と同様に低下したものの、他の調査地は明瞭な変化を確認できませんでした。地上部の蓄積量はおおむね 5%以下であり、落葉層や土壌の放射性セシウム濃度や蓄積量のばらつきによるセシウム分布の不均一性が、森林全体の蓄積量の推定誤差を大きくしていると考えられます。推定誤差は大きいものの、物理学的減衰以上に森林内の放射性セシウム蓄積量が減少していないことから、森林に飛来した放射性セシウムは、分布の主体を土壌に移行しつつ、森林内に留まっていると考えられます。

(4) 森林生態系の放射性セシウムの循環

チェルノブイリの調査等から放射性セシウムは森林生態系に留まり、その一部は内部循環するといわれています。一方、セシウム循環には樹種や土壌の違いによる影響も大きいことが知られています。これまでの調査から、2011 年当時、原子力発電所の事故で上空から降下した放射性セシウムは、常緑樹や落葉樹といった樹木の形状の違いを反映し、部位別の濃度に差が認められました。しかし、放射性セシウムは比較的移動しやすく、2012 年には樹木の放射性セシウムの多くが土壌や落葉層に移動しました。その後、2013 年、2014 年にかけては少しずつ樹体に分布する放射性セシウムの割合が低下し、土壌に分布する割合が上昇しましたが、その変化は小さく推移しています。樹木は根を通じて土壌から放射性セシウムを吸収しますが、木材中の放射性セシウム濃度の変化は小さく、また樹体内のセシウム分布の変化もあり、セシウムの吸収量を正確に見積もることができませんでした。これまでの調査結果から、少なくとも木材として利用可能な 40 年生程度の森林では、樹木による放射性セシウムの吸収速度は比較的小さいと考えられます。

さらに、森林全体の放射性セシウムの蓄積量の変化が少なく、かつ大部分が地表付近に留まっている状況や別途実施している溪流水中の放射性セシウム濃度の調査等から、放射性セシウムは森林内に留まり、森林外への流出量は少ないと考えられます。

森林生態系における放射性セシウムの循環を解明し、木材の安全性の確認や、放射性物質の除染・拡散防止等への対策に役立てるため、今後も継続して調査を行うこととしています。

6. その他

本調査は独立行政法人森林総合研究所が、福島県林業研究センター及び川内村の協力を得て実施したものです。